

英語教育・国際理解教育に携わる教員のための 研修プログラムの構築に向けて

倉増 泰弘*・松谷 緑

Development of Teacher Training Program for Teachers Involved in English Education and
International Awareness

KURAMASHI Yasuhiro*, MATSUTANI Midori

(Received January 15, 2008)

キーワード：英語教育、国際理解教育、教員研修

はじめに

ここ数年、小学校教育への英語の導入を中心に、英語教育の重要性や必要性についての議論は場所を問わず行われるようになってきた。今世界は所謂「グローバル化」が進み、その波は日本にも押し寄せてきている。しかし、言語は世界に無数にあるにも関わらず、なぜ英語なのだろうか。そもそも、どれほどの日本人が英語を実際に使って生活をする必要性に迫られているのであろうか。むしろ、英語が生活に必要である人の方が圧倒的に少ないのではないか。それにも関わらず、現在の日本の社会においては「グローバル化の波」に乗らなければならないというようなある種の切迫感に近いものがある。教育の分野においては「外国語教育＝英語教育」という構造ができあがってしまっていて、英語熱が加熱しすぎる場面もしばしば見受けられる。

しかし一方で、これから先この「グローバル化の波」に乗らずにやり過ごすわけにもいかないであろう。今の日本の状況を考えると、日米関係は世界情勢の点からも重要性を増すと思われ、政治的に、また文化的に「英語」という言語のもつ意味は日本人にとってより一層大きくなってくると予想される。そういった中で、日本人が自分たちの古来より持ってきた伝統やアイデンティティーを保つことはますます困難になってくるに違いない。

以上のようなことを踏まえ、今日本に必要な英語教育の実践のために、教員自身が英語技能の向上・維持に努めようとするのはもちろんのこと、常に自分と向き合い、「日本人とは何か」、「アイデンティティーとは何か」、「これからの日本に何が求められているのか」といった疑問と対峙しようとする必要があると考える。本研究は、これからの英語教育や国際理解教育に求められるそういった教員の「意識」に着目し、教員が現在の英語教育や国際理解教育に本質的に求められていることに目を向け、それと向き合う契機を提供する場としてのより充実した研修を開発することを目指す。将来の日本の社会

* 山口大学非常勤講師 (教育学部英語教育教室研究協力員)

を担う子供たちが、「グローバル化」や「アメリカ化」の中で、日本人としてのアイデンティティを見失うことなく、自分の頭で考え、自分の意志や存在感を示すための一つの媒体としての英語の獲得ができる英語教育の実践を目指す教員を支援したい。

圧倒的に母語社会である日本の環境下では外国語を教える教員にとって海外における経験は必須と言ってもよい。そもそもこの研究の企画は、韓国や中国では、すでに数年前から相当数の教員を海外に長期で送り出すという研修を行っているのに比べ、日本の現状はどうであろうかと考えたことがきっかけである。今の日本においては教員の海外研修の機会は極々限られたものであり、さらに、長期研修に赴くとなると職場の理解がなかなか得られないような実情も存在する。そのような中、多忙を極める教員が比較的時間の取れる時期である夏期休暇などを有効に利用し、また気兼ねなく思い切って海外で研修を受けられる環境作りができないかと考えた。

これまで、アリゾナ州立大学（アメリカ合衆国）と連携の下に、現職教員ならびに教員志望学生に向け、平成18年3月、平成18年8月、平成19年3月と、計3回、研修を実施した。平成19年8月には、山口大学教育学部主催、山口県教育委員会後援のもと、第1回の研修プログラムが実現した。以下に、その具体的な内容をまとめ、その成果と今後の展望について考察する。

1. プログラムの名称

「アリゾナ州立大学との連携による英語科教員のための研修プログラム」（英語教員向け）
「アリゾナ州立大学との連携による小学校教員の英語教育および国際理解教育のための指導力向上研修プログラム」（国際理解教育に興味のある小学校教員向け）

2. 目的・趣旨

実践的教授法の習得により英語科教員等の資質を向上させることをとおして、山口県の中学校・高等学校における英語教育、小学校における国際理解教育（英語）の質的向上を図る。（英語教育、国際理解教育における中核的な教員、指導者の養成を図る。）

この目的を達成するために、参加者には次のような具体的コンセプトを設定した。

- ・ Learn methods and techniques for teaching English as a second language
（第2言語としての英語教授のための方法論と技術を学ぶ）
- ・ See things with various perspectives
（様々な視点で物事を見る）

3. 本研修の取り組みの流れと概要

	日 付	摘 要
事前研修	6/17 (日)	第1回事前研修 (小学校教員・中学校教員合同) 第2回事前研修 (中学校教員対象) 第2回事前研修 (小学校教員対象)
	7/15 (日)	
	7/21 (土)	
現地での研修	8/6 (月)	日本出発 (同日現地到着) オリエンテーション、レセプション 授業、アクティビティー 現地出発 (翌日日本到着)
	8/7 (火)	
	8/8 (水)	
	8/17 (金)	
	8/18 (土)	
事後研修	9/2 (日)	事後研修 (合同) アンケート実施

3-1 事前研修 (6月17日～7月21日)

山口大学において、アメリカでの研修に際して最低限必要な英語教授法、国際理解教育、コミュニケーションに関わる理論と実践について、3～4時間程度の講義および演習を2回実施した。

第1回事前研修 小中合同 (6月17日に実施し、欠席者1名は6月21日に対応)

第2回事前研修 中学校 (7月15日) と小学校 (7月21日) を別々に実施

3-2 現地での研修 (8月6日～8月18日)

アリゾナ州立大学 AECF (American English and Culture Program) との共同で以下の研修内容を実施した。

- ・Teacher Training (教授法講座) : 英語教授に関わる様々な講義と演習
- ・English Skills (英語技能向上講座) : 英語技能の向上に向けた訓練
- ・Activities (現地企画) : 講座・研究協議以外の博物館訪問等の活動

3-3 事後研修 (9月2日)

現地で学んだことを報告し、さらなる課題や展望について考える場としての事後研修を実施した。

4. アンケート

事前研修後と現地での研修後の計2回アンケートを実施した。研修全体に関するアンケートによれば、この研修で「印象に残ったこと」や「今後も残してほしいこと」について以下のような記述があった。

4-1 AECF での授業について

(印象に残ったことは・・・)

「M先生のTeacher Trainingです。教師として、素晴らしい出会いでした。」

「ASUでの授業です。学ぶ事が本当に楽しくて、寝不足も苦になりませんでした。」

「AECPの授業。単純に英語を使うのは楽しいと思え、役立つ情報をテキストからでなく、2人の先生方自身からたくさんもらった。」

4-2 現地企画について

「ハードミュージアム（ネイティブアメリカン博物館）が一番印象的でした。はずかしいことに、それまでネイティブアメリカンの歴史についてほとんど無知だったのですが、ここを訪れ、日本に帰ってきてもう一度よく調べてみて、異文化を学ぶと共に、自分達の歴史や伝統を大切にしていくこと、それを伝えることが教員として必要ではないかと気づかされました。」

4-3 事前研修について

「事前研修で取り上げられていた内容は、授業を受ける時や、その後のプレゼンやエッセイを書くときにすごく参考になります。」

5. 研修の成果

事前研修から事後研修に至るまで、一貫して参加者は意欲的に取り組んだ。

事前研修は、休日に大学での講義や演習に参加してもらうという形で実施したが、欠席者もなく熱心な態度であった。また、英会話の練習を通して、ほとんどの参加者に著しい進歩が見られた。

現地での研修に関しては、一人の脱落者もなく全員が所期の目的を達成し、certificate（修了証明書）を受け取った。AECPの指導者たちも参加者の取り組みについて高く評価していた。また、多くの参加者がTeacher Training（教授法講座）の授業中のみでなく、いろいろな場面でアメリカの人々と接する場合はもちろんのこと、日本人グループで移動する際や、日本人引率者に質問をする際も積極的に英語を使ってコミュニケーションをしよう努力していた。

事後研修では、教育学部学部長も出席するなか、参加者が各人のアイディアに基づくプレゼンテーションを行い、その研修の成果を発表した。

以下に具体的な成果をまとめる。

5-1 英語技能の向上

第一に、英語教員として必要な4技能、中でも、英語コミュニケーションの指導のための「話す・聞く」といった活動において、多くの参加者が目覚ましい進歩を遂げた。いろいろな場面でのコミュニケーションにおいて、積極的に英語を用いようとする参加者の姿が見られた。また、事後研修において、参加者の半数は英語でのプレゼンテーションを行った。「話す・聞く」活動のみならず、帰国後の報告文などに見られる参加者の「書く」活動においてもその成果が見られた。

このような英語の実践を可能にしたのは、アリゾナ州立大学AECPの授業の質の高さによ

るところが大きい。事前研修において、二回にわたって英語でのプレゼンテーションや議論の仕方、更に英語文章の書き方などを演習し、また、英会話を行った成果と言える。こういった事前研修の意義については、帰国後のアンケートにおいても指摘されており、もっと回数を増やしてほしいという意見が複数あった。

5-2 実践的指導法の獲得

この研修では参加者に常に意識してもらった2つのコンセプトがあった。第一は、“Learn methods and techniques for teaching English as a second language”（第2言語としての英語の教授のための方法論と技術を学ぶ）というものであった。この点においては、研修直後のアンケートにおいてもアリゾナ州立大学 AECF での講義・演習が高い評価を得ており、また帰国後それらを生かした実践を行っているという報告を受けている。

5-3 国際理解教育の指導の素地の獲得

また、もう1つのコンセプトは“See things with various perspectives”（様々な視点で物事を見る）というものだった。この点において、参加者の作成した報告文を眺めてみると、アメリカやメキシコの文化やネイティブアメリカンの文化を、教師として、英語の1学習者として、日本人としてなど、様々な視点を持って体験してきたことが窺える。他文化に表面的に接したということにとどまらず、それをいったん受け止め自己の内面にあるものと相対化することを通じて、日本のよさや日本人としてあるべき姿などを考察するまでに至った人もあった。これは国際理解教育の指導にあたる教員としての素地を獲得したという意味において大きな成果と言える。

5-4 報告文に見える参加者の教師としての成長

研修後の参加者の報告文からは、上記の3つの成果に加え、参加者にとってこの研修がそれぞれの立場において有意義であったことがわかる。英語教育・国際理解教育に携わる者として、英語技能の向上や指導力の向上を目指し奮闘する中で、自ら教師としての自己の在り方について内省する機会ともなった様子が窺える。

「アメリカに到着して間もないころは、アメリカの特色ばかりに目がいていたが、日数が経つにつれ、アメリカを知れば知るほど、日本についてもっと考えるようになった。異文化交流を通してこそ、アメリカや日本のそれぞれのよさに気づくことが多かった。日本が大好きなホストファミリーに、日本文化の深さや素晴らしさについて考えさせられることもあった。日本のよさを再発見するとともに、日本人としての誇り、日本人としてのアイデンティティーを大切にしていきたいと思う。」 <小学校教員報告文より>

“...I have thought my own life and Japan, my country, since I went out of Japan. Then talking with foreign people, especially my host mother, whom I have much time to talk with, has a big value to me. It expands my perspectives.”（日本を離れてから、私自身の人生や母国である日本について考えてきました。そして外国の人々、特にホストマザーと話したことが大変価値があったと思います。そのことが私のものの見方を広げてくれました。） <小学校教員報告文より>

“Especially, Mexican actuality, and the history of Native Americans were impressive to me as an English teacher. Through these experiences, I felt that a new perspective was born inside me…” (特にメキシコの実情やネイティブアメリカンの歴史は英語教員である私には印象深いものでした。これらの経験を通して、私は自分の中に新たな視点が生まれるのを感じました。) <中学校教員報告文より>

“this program gave me a lot of valuable things about teaching English and an opportunity to meet many people and cultures. I have to make use of what I have learned in Arizona State University…” (この研修で、英語教授に関する多くの大切なことを得て、またたくさんの人や文化と出会う機会に恵まれました。アリゾナ州立大学で学んできたことを生かさなければいけないと思います。) <中学校教員報告文より>

「この『出会い』を通して私はシンプルに『知ること、学ぶということが、心から楽しい!』と感じました。今後は、この研修での自分の経験を生かして、児童・生徒が学ぶ喜びを素直に感じられるような、価値ある『出会い』をプロデュースしていきたいと思えます。」 <小学校教員報告文より>

“We need to study hard and try to improve by learning day by day, even little by little. This program helped me a lot to reconfirm my intention to be a life-long-learner of English and to be a professional teacher of English.” (私たちは努力し、日々少しずつでも学ぶことにより向上しようとする必要があります。このプログラムで、私は生涯英語の学習者であると同時にプロの英語教師であろうとする自らの意志を再確認しました。) <中学校教員報告文より>

「この研修では研修を体験（経験）している自分自身について深く考えさせられました。それと同時に今自分が聞いたり、使ったりしている言語（言葉）は生きているのだということについて思いを強くした研修でもありました。」 <中学校教員報告文より>

“I was greatly influenced by this training… I really enjoyed the classes at AECPE every day… I also had good experiences in the field trip activity.” (この研修は私に大きな影響を与えました…毎日本当に AECPE での授業を楽しむことができました…現地企画においてもたくさんの良い経験をさせてもらいました。) <中学校教員報告文より>

「英語は楽しい、と思えた2週間であった。自分の新しい課題もできた。それはこの研修が、よく考えられたプログラムであり、授業や課題がきちんと仕組まれていたからに他ならない。」 <中学校教員報告文より>

6. 課題と改善の方向

よりよい研修プログラムを構築するにあたって、解決すべき課題を明確化し、その対策を検討していきたいと考えている。今後の改善の方向性として以下の2つを挙げたい。

6-1 研修内容の難易度

参加者の英語能力に差があり、研修内容の難易度の設定にはかなりの配慮を必要とした。主催者側の意図としては、幅広い層の教員に研修の場として活用してもらい、それぞれのニーズに対応した質の高い実りある研修の構築を目指している。今後 AECF とともに協議を進め、様々な参加者のニーズにできるだけ対応できるよう、カリキュラムや研修内容を充実させていきたい。

6-2 アンケートの実施方法

今回のプログラムでは、主に2回のアンケートを実施した。前項にも記載しているが、参加者の生の声によるこのプログラムの批評・感想を得ることができ、大変参考になった。ただし、教員の意識や実態を知る上で必要な項目はさらに検討が必要であると考えている。今後実施していくプログラムの実施体制を整えて行く中で、より具体的な意見やより明確な指標が得られるようなアンケートの作成や実施方法を検討していくつもりである。

7. 今後の展望

現在の日本の学校の現状や英語教育の実情を考えると、研修の重要性は一層高まっている。中学校・高等学校教員にとっては、海外に出て今の英語に身近に接することが必要で、また移り変わる世界情勢の中でより「強靱な」素地を身につけること、またそうしようとする「意識」を培うことが求められると考える。一方、小学校の国際理解教育に携わる教員は、ゲームや歌などの即効性のある知識だけではなく、自ら他文化を体験することで指導のための安定した基礎を身につけることが大切であろう。

今後、アリゾナ州立大学 AECF との連携を強め、「事前研修」、「現地での研修」、「事後研修」の流れの中で、それらを一層有機的に機能させながら、山口県の英語教育や国際理解教育に関わる教員の資質向上を目指す。

教員が気兼ねなく思い切って海外で指導力や英語力の向上に取り組める機会を提供していきたい。

おわりに

本研修の実施に際し、山口県教育委員会、教育庁関係各課の皆さまをはじめ、市町教育委員会、学校、関係団体等の皆さまには、物心両面にわたり多大なご支援ご協力を賜り心から感謝しております。また、多忙な中時間を割いて企画者の説明に耳を傾け、ご指導いただいた吉田一成教育学部長、さらに、貴重なご助言やご尽力を賜りました本学部の霜川正幸准教授に感謝の意を表します。今後も、山口県における英語教育、国際理解教育等の充実、英語科教員等の資質の向上に向け、本研修プログラムを充実・深化させていきたいと考えております。

付記

本研究の一部は財団法人山口大学教育研究後援財団の助成を受けている